私のナンバーワン 10

日本画と私

杉戸　清

昭和の7年ころから，俳句をつくりはじめた。ちょうど私が名古屋市の下水課長をしていたころで，当時下水課の中に俳句の先生というか，あるいは宗匠というか，そんな方がいて，熱心に俳句をすすめられたのが，その発端である。

それから課内や水道局内の俳句の好きな連中といっしょになって，月1回の俳句例会や，付近の名所旧蹟への吟行などを続けていた。

昭和 14 年に市役所をやめて内務省へ移ることになって，それまでに作った俳句をまとめて，1冊の本にした。名づけて「草の実」という本であるが，それを名古屋をたって東京へゆくときの餞別として，皆さんへ贈呈した。

東京へ移ってから，内務省の中の土木局，これは後に国土局と改称されたが，その土木局の中の有志の方々と，またまた俳句を作るようになった。たいがいは月に1回の割合で句会を持ったが，たまには付近へ吟行に行くこともあった。

そうこうしているうちに，戦争がだんだん激しくなって，とても俳句どころではなくなって，しばらくは句作を中絶した。そして終戦となり，昭和 22 年の春に内務省をやめて，再び名古屋市役所へ入って，水道局長ということになった。

日本画を制作中の私

終戦後のごたごたが，だんだんと納まってきた昭和 24 年ころに，またまた俳句を作りはじめた。おいおいと仲間もできて，以前に市役所にいたときと同じようなことになった。

そのころには，俳句を短冊や色紙に書くことも多くなった。そして，そのようなことになると，どうも俳句の文字だけでは，なんだか＜淋しい＞というように感じられ，そこにちょっとした＜絵＞のようなものがあれば，非常に＜ひきたつ＞のではないかと思った。

そんなことから，これはひとつ絵を習ったほうがよいと思った。俳句と絵，これはもちろん俳画というものであって，絵といっても非常に堅い，また緻密な絵ではない。いってみれば，文字で申せば草書か行書のようなものである。

そのように簡略な絵であっても，これはこれで，またなかなかに難しい。文字でもそうであるが，草書や行書を書くには，まず，楷書がしっかりと書けなければ駄目である。けっきょく，絵の先生について，本格的にしっかりと日本画を習ったほうが良いと思った。

たまたま家の近くに日本画家の朝見香城先生が住んでおられた。香城先生は，いわゆる文展，帝展――現在では日展であるが――その日展の常連の作家で，名古屋では屈指の先生である。その香城先生の門を叩いて，弟子入りしたのが昭和 24 年の秋のことである。

爾来今日まで，私はひまのあるときは必ず日本画を描くようになった。もう 25 年以上にもなるのであって，随分と永い間である。私と同様の弟子の中にはすでに日展に何回も入選している一人前の画家も数人おられる。

はじめ先生に絵を習いたいと申し出たときに，先生は心ひそかに，まあ半年か一年も続けば，良いほうだと思ったと，後になって申しておられたが，それが，私のいわゆる＜こり性＞のせいか，いままでずっと 25 年も続いて日本画をやっているのである。

この4月には丸栄デパートの画廊で「杉戸清 俳画展」をやり，つい最近の8月には丸善の名古屋支店の画廊で，「杉戸清 富士25景展」をやった。いずれも，まぁまぁのできばえと自分では思っている。

「玄人はだし」といわれてはいるが，それはいわゆる「お世辞」というものであろう。しかし，私と日本画とは，今では，切っても切れないものとなってしまった。

（筆者・名誉会員 工博 前名古屋市長）